

済問題が内包されており、そのような中で日本の国民総生産の年延び率10%以上を誇示し、いたずらに利潤追求に走ることは世界のひんしゆくをかうことになり、資源をもたない経済大

国は資源によって足元をすくわれる結果となる。

このような状況の中では、いたずらに守成の難を嘆くよりは、新たな観点に立つて、新たな創業の難に立ち向う姿勢が必要であろう。

年 頭 所 感

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 戸蒔義次

戦後の日本経済は、重化学工業の推進を軸にして成長したため、エネルギー需要は著増し、昭和45年には石油換算で30年の5倍に当たる3億1千万KIとなった。これに伴ない輸入エネルギーが増大し、その割合は30年の24%から45年には83.5%と激増した。その最大は総エネルギーの71%を占める石油であるから、アラブ諸国の石油輸出制限は大きなショックであるが、どうみても日本経済発展の基盤は脆弱・不安定と云わざるを得ない。

安くして使用に便利な石油の輸入を計るのは当然としても、同時に国産エネルギーの開発も重要である。核融合や原子力エネルギーの実用化研究もさることながら、もっと身近な石炭利用、水力発電など改めて見直す必要がある。これに関連して想起されるのは、戦時中の酒精原料用甘藷・馬鈴薯の増産である。戦争用ではあつたが、航空燃料としてアルコール・ブタノールの生産を芋から実現したのである。現在の航空機は当時とは比較にならぬ性能の故にアルコールは不適としても、地上輸送用の自動車・貨車には使用できると思う。輸入は相手国の都合に左右される。国産エネルギーの開発は、我々の努力によって確実に可能である。

最近のわが国農業において、成長作物と呼ばれる園芸・畜産、有利に処遇される米作に比し、畑作の衰退は顕著である。衰退の理由は価格や経営規模にあることは事実であるが、一般畑作物に対する軽視と畑地力増強に対する認識不足がこれに拍車をかけていることを指摘したい。麦・豆・でん粉など安価に輸入できるからと云って、これらの生産を軽べつする風潮さえ生じて、その栽培により耕地を豊かにし、国土を利用することへの尊敬を欠いたことは否めない。これが生産意欲の減退に繋がつたのである。国産エネルギー開発の見地から、衰退畑作に大義名分を与え、起死回生させたいと願う。

また欧州の土壌は、氷河により岩石が摺り潰されて生成したため、養分に富むのに対し、わが国畑土壌の多くは火山の高熱により焼尽されて養分的には藻抜けのからである。これを改良するには、欧州に増して堆厩肥・熔成燐肥・石灰などを多投する必要があるが、水田に比し手の打ち方が不足である。耕地の地力を増強することは、国土の価値を高めることゝ知るべきである。

新幹線を全国に走らすのもよい。四国に橋を三つかけるのもよい。しかし、それにもまして

重要なのは、1カ月も雨がなければ給水制限に脅える不安、石油輸入が減ったとあって暖房や物資不足に感ずる焦燥を掃討することである。山間僻地に何本もの電柱を立て、原子力発電によって送電するより、家畜排泄物などを原料と

するメタンガスにより小発電その他の使用を実現するなど、身近な物資の巧みな利用、国土に降る雨は1滴たりとも無駄にしない様式こそ、誇り高い文化と思う。

会長就任の挨拶

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 戸莉義次



私はこのたび（財）日本植物調節剤研究協会の会長に就任することになりました。10年前の創立当時から関係させていたゞいて参りましたが、この間の協会の発展は賞讃すべきものであり、その組織も仕事の内容も飛躍的に拡大致しております。このように大きく成長した協会の会長として、これをさらに発展させてゆく責任の重大さを思う時、その任に堪え得るか不安を感じずにはおられません。しかし、就任したからには力をつくして精励する覚悟であります故、協会職員はもちろんのこと、業界、農林省、試験研究機関その他関係各位の協力を願う次第であります。

会長が替ったからといって、協会のゆき方に特に変化があるわけではなく、従来の路線を中心に、多くの関係者の総意を入れて、いつそう建設的に進めるつもりであります。したがって、お気づきの点を腹臆なく知らせていたゞいたり、鞭達して下さるよう格段のご配慮を念願するものであります。

最近、農業の持つ役割として従来の食糧供給のほか、環境保全、緑地空間の提供などの意義が評価されるようになりました。それは、農

業にとって有難いことに違いありませんが、そのために農業の本命をゆがめてはならないと申します。農業の本筋は、あくまで食糧の安定供給にあるものと考えます。

その安定供給のために、戦後の農業は労働生産性の向上を目途に努力を傾注して参りました。先進農業国の生産性水準に接近しようと、機械化を図ったり、プラスチック製品や化学薬剤など文明の産物を農業に導入して、生産の能率化を推進したことは事実であり、多大の効果をあげるとともに、他面地力の減退とか、農薬公害など心配される状況もでてきました。

つまり、労働生産性向上の路線は依然として踏襲すべき目標ですが、その手段において反省すべき問題が明確になってきたと解すべきであり、反省した点は直ちに実行に移さなくてはなりません。現在一部に提唱されている有機農業とか無農薬農業にくみするものではありませんが、その精神には受け入れるべき点があると思います。除草剤の果してきた意義は真に巨大なものがありましたが、薬剤と草という関係のみでなく、農業の、そして広くは国土の中の循環要素として、その位置づけを明確にしてゆきた